立原正秋

美しい城

昭和四十三年四月二十五日　第一刷

定価　五〇〇円

著者　立原正秋

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五―一二一一

印刷　凸版印刷
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函

万一落丁乱丁がありましたらおとりかえします

©1968　Masaaki Tachihara　Printed in Japan

美しい城

これは、昭和十六年頃のある感化院を舞台にした作品ですが、
当時、現実に存在した感化院と、作品のなかの感化院とには、
いろいろな意味で距離があることをことわっておきます。

作者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一部　春の死……5
第二部　熱い日々……67
第三部　城……129
第四部　三月……247
後記……269

装幀　生澤　朗

第一部　春の死

五つとせ、いびられ通しの院生よ
いつかは役人を殺らしちゃおう

（ある時期、ある少年感化院の少年達のあいだで愛唱された数え歌より）

「お兄さん、俺を教えるつもりかよ」

と少年は私を見るなり言った。

少年は、細くしなやかで鞭のような軀をしていた。まだ花冷えの季節だというのに、上は白い運動シャツ一枚、下は軀にぴったりついたデニムのズボンを穿いていた。三日前の午後、私が彼の母親と会ったときの話では、どこでもよいから大学に入れたい、ということだった。

「みんな俺を教えられずに帰って行ったぜ」
少年は私を脅迫するように言った。
「教えられるか教えられないかは、やってみなければ判らんだろう」
私は、彼の鋭い視線を受けとめながら答えた。このとき、彼の伯母が茶を運んできた。彼の伯母が出て行くまで、私と彼は視線をかち合わせたままでいた。やがて伯母が部屋から出て行った。
「やめときなよ。いったい俺になにを教えるつもりなんだね？」
少年はさっきよりふてぶてしい態度になった。
私は、目の前にいるこの少年が好きになりそうな気がした。いいかえれば、かつて私が歩いてきた道を、この少年が歩いているような気がした。この少年のような家庭環境では、子供はだいたい軟弱になり、そして不良になり、要領のよい性格になり、罰せられると青菜に塩をかけられたようなだらしのない者になるのが殆どだが、この少年は、家庭教師として訪ねてきた私の前で軟化しなかった。
「やめときなよ、と言われても、やめるわけにはいかんね。まあ、言ってみれば、俺は君にアドバイスするだけの役だ。勉強はきみがやるんだからな」
「アドバイスだって？　出来るもんか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「君はなにがいちばん出来ないんだね？」
「ああ、それなら教えてやろう。俺は学科ならみんな出来ないね」
「それで、学科以外になにが出来る？」
「それなら喧嘩だ」
少年の目は瞭かに私に逆らっていた。
「どうだろう。それでは手はじめに喧嘩から教えてやろうか」
私と少年の視線は相変らずかち合っていたが、私は彼にやわらかい目を向けていた。
「なんだって？」
今度は少年が意外だといった目を見せた。
「君のこれまでの喧嘩の歴史でもきかせてくれないか」
私は間をおいて話しかけた。
すると少年の目は俄かに精彩を帯び、これまで何人と喧嘩をしてどのように張り倒してきたかを、備に語りだした。喧嘩に勝ってきたことは、彼のこれまでの十七年の生涯のなかで、ただひとつの矜りであった。
私とこの非行少年とのつきあいは、このような出逢いから始まった。依田祐一。これが彼の戸籍名であった。通称は祐坊、しかし、後に彼の名をもっとも耀かしめた通称は、弁天のハー

ト破り、という世にも優雅な渾名であった。あるいはただ単にハート破りの祐、もしくはハート破り、そして竟にはハートというだけで、人々は彼の鞭のようなしなやかな軀を連想することが出来た。心臓破り、というより、ハート破りの方が優しさに富んでいる、と言った者もいた。

教護院とは、不良児、つまり非行少年を、一般社会から隔離して教育し保護するところである。教護院のほかに少年院とか感化院とかその他さまざまな名称が役人によって冠せられてきたが、私には、少年刑務所という呼称がいちばん適切のように思える。しかし、歴史的呼称はやはり感化院であろう。ここには懐かしい響きが籠められている。

人々は感化院、ときいただけで、そこに収容されている非行少年をおもいうかべて眉を顰める。

しかし、このような視線にもたじろがず、非行少年のうちの或る者は、孤独のうちに、積み重ねてきた非行そのものを自分の倫理に転化して行く場合があり、弁天のハート破りは、そんな稀な一人であった。

弁天のハート破りという渾名は、彼が最初の感化院を出てきた直後につけられたのであった。私は、ここに、いまなおその苛酷な美しさに耀いている存在のため、ハート破りが入っていた感化院の場所を、まったく架空の土地に設定しなければならない。

私が彼と出逢った頃、彼は高等学校二年生で、まだ感化院の経験もなければ、もちろん弁天のハート破りという渾名もついていなかった。

彼の家は、横須賀線の鎌倉駅から歩いて十分とはかからない扇ヶ谷津というところにあり、家の庭には大きな欅の樹が一本そびえていた。彼の母は横浜でバーを経営しており、夕方の四時になるとバーに出るために家をあけ、帰宅はいつも終電車であった。そのほか家には母親の姉である独身女がいた。つまり彼の伯母で、この伯母が女中代りに家事いっさいをみていた。

私のみたところ、彼の母は四十歳前後で、まだ充分に美しかった。目尻がややさがっているお亀型の顔で、もし夫に死別されなかったら、仕合せな生活をおくれる女であった。

出来れば私は弁天のハート破りの名を遠く時間の果てまで伝えたい。もし私が彼と同じ感化院出身者でなかったら、彼の犯したいくつかの罪は、私の魂にとってなんの所縁もなかっただろう。

私は彼と急速に親しくなって行った。私は彼に教える以前に彼の友人であった。

ある日私は、彼の机の上に異様な喧嘩用の武器を見つけた。直径十センチほどの古い革バンドに、自転車のチェーンが縫いつけてあるものだった。

「なんだ、それは？」

と私は彼に訊いた。

「武器だ」
彼は答えた。
そして彼はそれをとりあげると、左手の親指をのこした四本の指に嵌めた。バンドは四本の指にぴったり嵌まり、チェーンのついている方が四本の指の背に見えた。ああ、これで喧嘩相手を殴るんだな、と私は直感した。
「そんなもので殴ったら相手はひとたまりもないだろう」
「使うことはめったにないよ。いつも素手でやるが、なかには匕首を呑んでいる奴がいるんでな、そんな奴とやるときは、こっちもこれを使うんだ」
彼はチェーンのついた武器を嵌めた左手を数度前方に突きだしてみせた。
「それでやったことがあるのか？」
「一度だけだ。H高の番長に眼づけされたときだった。先生が俺に教えにきた頃だよ。俺は、奴の頬にこいつを当てて捻ってやった。眼づけしてきたのは奴の方だから、奴、泣きねいりさ」
番長とは、平安時代、中衛府、近衛府、兵衛府、などの舎人の長をつとめた者のことで、このような優美な古語が、現代の非行少年の長に冠せられているのを、私は面白いと思った。眼づけというのは、相手をじろっとにらむ、という意味で、眼を相手の眼にぶつけることだった。

非行少年同士のいわれのない喧嘩は、たいがいこの眼づけからはじまる。私の旧制中学時代にもこの眼づけはあった。正確には、眼を相手の眼につける、という意味だろう。

私は週に二回、火曜日と土曜日に彼を教えに通った。私が彼のチェーン武器を見た日は土曜日で、彼の家に通いだしてから四回目であった。私は学科については彼になにひとつ教えなかったし、彼もその件にはふれなかった。そのかわり、共通の話題、つまり喧嘩について四回話しあった。彼の学科をみてくれないか、と私に頼みにきたのは、私の知人の奥さんだった。その奥さんと彼の母親が知りあいだったのである。

「石見さんのような喧嘩のつよい人でないと、教えられない子らしいのよ」

とその奥さんは言いながらわらった。

「とんだところを見込まれたものですね」

私はその奥さんから、前任者がことごとく失敗して引きさがったことをきかされた。

私が感化院に送りこまれたのは旧制中学三年生の春で、七カ月間だった。私が少年院に入ったとき、少年達のあいだで連綿と受けつがれている数え歌の最後に、つぎのような一節があった。

十とせ、どうせ果てるなら刑場の
露と消えましょ名もなしに

この数え歌には感傷がふくまれていなかった。自分をこの感化院に送りこんだ者、またここで自分をいびる役人共を、いつの日にか殺らしてしまおう、という苛烈な精神を具えた少年が何人かいた。このような少年にとって処刑場は金色燦然とした臨終の場であった。事実、感化院が私の精神形成にどのような役割を果たしてきたか、私は自分でもいまだにそれを明確に分析することが出来ない。当時の仲間のうちのある者は、彼の希望通り処刑場で果てたのがいた。私がそれを知ったのは戦後数年経ってからである。私は処刑場に行かずに作家になった。もし刑場で果てたかつての仲間が生きていて私のことを知ったら、彼は私のことを堕落したと言うかも知れない。しかし私が作家になったのは、私が語るべきものを持っていたからである。このほかにはどんな理由も見当らない。

話をハート破りに戻そう。

私が感化院出身者であることを知ったときの彼の目の輝きを、私はいまだに忘れることが出来ない。彼は自分の父を記憶していなかった。物心ついた頃、彼の母にはすでに男がついていた。妾という存在を知ったのもその頃であった。以後、この少年がどのような道を選んで歩いてきたか、私には手にとるように判った。彼の苦痛や淋しさには吐け口がなかった。それは社会の偏見に当って自分に跳ねかえってくるだけであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com